新編水滸畫傳

初編

八

ヘ21
875
8

門 遠21
號 875
巻 8

神書佛書醫書國學
繪本 辛酉新古賣買
辛遊いろく洗ひ間
御注文アリ上
後板町三條橋西入
河内屋孫兵衛

新編水滸畫傳巻之八

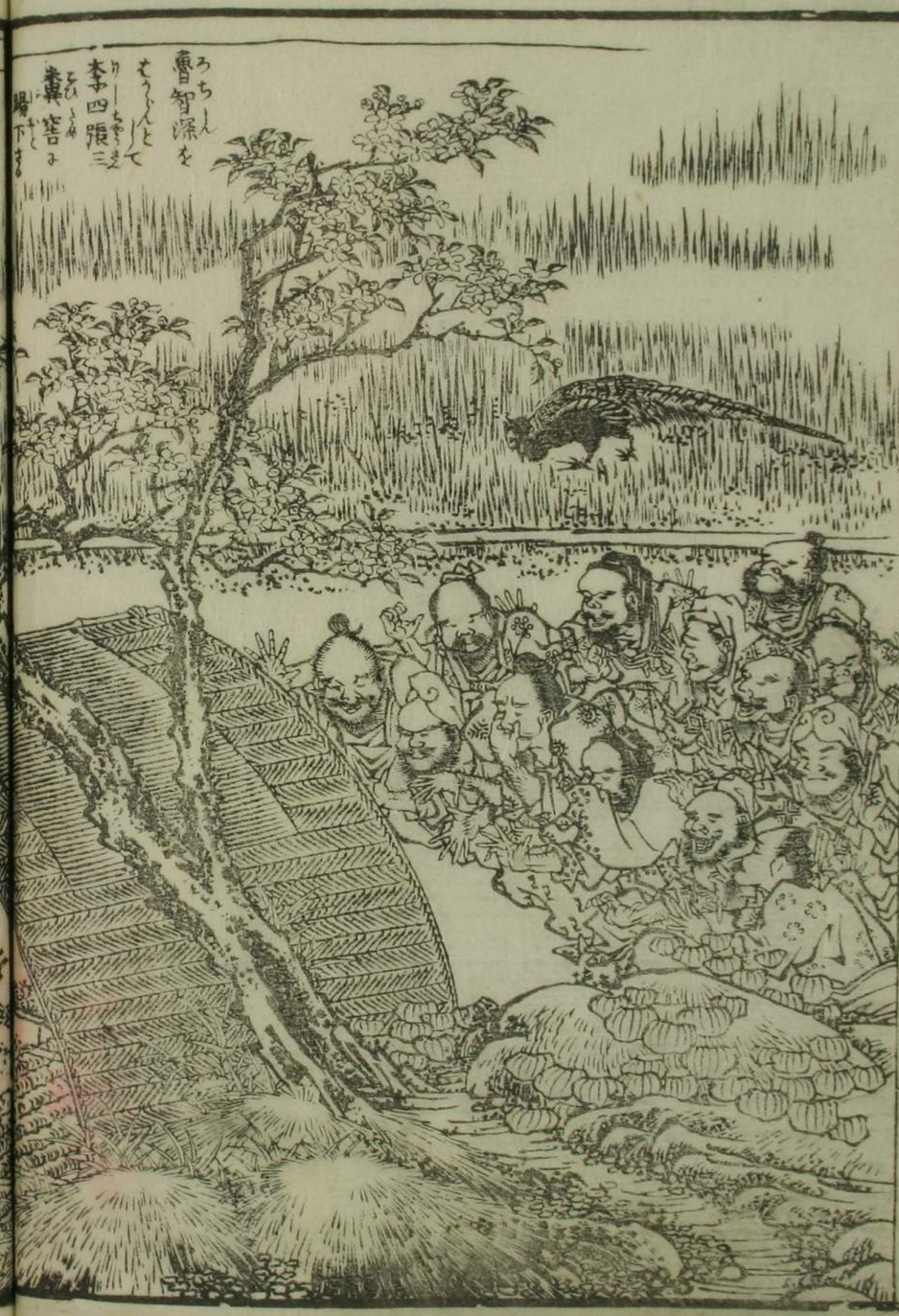
東都　曲亭主人編輯

○花和尚倒ま垂柳を拔く

酸棗門の外ふ。二十人の濠ほ破落戸の中間ふ。両箇の頭ゐりて一箇ハ過街老鼠張三と呼ま。一箇ハ青草蛇李四と名告り。この両人魯智深を誘邀人殘ふ濠ほぐもいいまぐ走り動まもく糞窖の辺ふあり。魯智深ハ彼ホが摸様をうんく。さやく反心あるゆを猜し。大踏ゐ歩くよりく。衆人のほとりよ到るを李四張三走りゐ足。左右の脚を楚と含ゐく。既ま窖の裏よ槍下さんとするところを。魯智深ち手く身をたりて。右の脚を下と揚。李四を糞窖の裏へ踢下しゐれバ張三大ま驚き怕ま。走り退んと志ゐりしを。魯智深ち左の脚をゆくこ足と

忽地踢下せば。彼二三十人の潑皮ハこの光景まこと驚れ連忙しく脱去んとすを魯智深声をふり立て。汝ホ一人脱去ずば。これ又一人を把て踢下し。又二人脱去ずば。二人を把て踢下さんと。いふ声耳を衝抜あぞ。衆皆呆れて目を瞪り。一堪ふなく動ぜず。只見れハ彼李四張三ハ。糞窖の裏よりあるく。頭ぐりをさし出全身ハまべて糞よ塗て黄色よ変て蠢く。形状木犀の花よ醉し。野の鳥よ彷彿たり。頭髪の上よりも蛆虫跋登り。耳の根より頸籌て只顔上ばかりと要せども。底ふくくして上りもぜず。只声を嗚呼。師父饒恕ま。叫び。祖よ。魯智深ハおはしくいし懲し。汝ら〳〵の破落戸。やく那鳥を拖上まれて。汝ホを饒んと嗔る。衆人ハ去る。糞を擔ふ枕をさし伸く。張三李四ハ推ふ推せ。から〳〵胡蘆架の下よ扶あげれど。臭くして近づきがたし。魯智深

呵〳〵〳〵と笑ひ。元るこの春蟲物。やく菜園の池水を洗ぎりけて洗ひ。ホ〳〵せ。これ汝ホ〳〵説話ん〳〵ハ。両箇の潑皮ハ。やがて池水ハ臭を浸し。洗ひ了し〳〵破落戸ホ衣服二ッを脱て二人よ被せ。魯智深背後ホ跟て。こゝを解字の裏よ来る。付よ魯智深衆人ハ對ひ。汝おハこれ甚麼ある鳥人。これハ漫ホ虎鬚を捋て。これハ戲弄ん〳〵せ〳〵ぞ〳〵いふ。彼張三李四。件の火半〳〵もハ唾き。これハ〳〵おハこのほ〳〵よ〳〵賭博ま。錢を討て生活りのあるが。錢盡るときハ〳〵盜て。衣飯碗〳〵せ〳〵ぞ。この解字ハ位持せる長老。これを樂ずるあこゞり。志るホ相國寺の裏ハ。いまゞ師父をくるし。今日か〳〵紀めるとその。膂力のまゞれひを志り。忽地後悔さるらんぞ。ひあくハとぞ倍話りける魯智深これをゆく。汝ホこれを瞞


魯智深を
さうくんとして
李四張三
糞窖に
陽下す

文を休よ。されば足関西延安府老种経略桐公帳前の提轄官魯達と
いひしものなるぞ。人を打殺すゆゑ。和尚なり。法名を智深と号し。今
番五臺山へ参りしと。汝ホ二三十人ばかりの縦千軍萬馬の隊を殺ぐ
さんとの容易なると。衆の撥はしに嗤ふと回答して拜して別れ
ぬ。さて撥はしをもて。ふたり智深が勇力を屋伏。次の日商量して些は銭
を湊て解の酒と一隻の豬とを買て。これを智深が廨宇へ送り。ゆきぐ
安排して魯智深を座席の中央へ清待して。ここは西邊一帯へ居おれ
て。酒のあそびをぞ。魯智深いと怪て。汝ホ甚の敵へ鈔を壞て。これ
を管待ぞと問へば。衆人答て。師父今這里へ住持しまへば。我們よきしろ
肴を買て幸甚。よろこび喜て些の主人。喜を竭ておもてなす。魯智深も
大よろこび。喫て半酣なれば。二三十人のその中へ唱ひ有又
説ものあり。又笑ふものあり。いろ〳〵と奥をぞ添て
ほめる。清ぶ〳〵も門外へ鴉あり。只顧哇〳〵と啼。衆人叩歯弾化し
て。赤口上天白舌入地と口遊ぶ。魯智深耳を側て。汝ホ烏乱の言
語をなす。甚ものをいふぞと問へば。衆人答て。目今鴉志ぶ〳〵叫ぶよりて。
に吉ならんと。ヤスるゆゑ。ひと回答されば。種地なる道人傍へありてうち
笑ひ。近曾墻の角辺なる楊樹の上へ鴉巣を添て。毎日晩へ到るまぐ。
いと聒〳〵こそ〳〵いふ。衆人これをひそ〳〵。志ふ伏巣をとり下し〳〵耳の根
を清めべし。誘へ人といひつけ。お外面へ走り出ば魯智深も酒興へ
ふ〳〵。都へ彼首ゆき〳〵いたるゆゑ果〳〵緑楊樹の上へ鴉の巣あり。此
樹へ〳〵せ登り。枝高へ〳〵輙へとり卸すもあふぎれて衆
人奔走り。撥子をとり〳〵まく〳〵とそ。おどひあくるを。李四拖〳〵ぬ。

れ之来樹み登りて猴のごとく。樹てをり〳〵まるさ〳〵もあり。盤上んと
く立まのを魯智深うち笑ひ。汝ホ且〳〵退〳〵つゞまるところをこんのとひ
もあへず直裰を脱ぎて。彼樹の本を楚と抱き身を倒縦〳〵越〳〵こえた
ぶ〳〵の大木根より拔〳〵流ハ一の完〳〵なりつ。二三十人の潑皮ハこれをこんへく
拜伏し。師父ハれ人みあるべ。正真の羅漢なり。千万行の氣力ゆゑぞう
せがぶ〳〵との樹を拔得べきく動容あきつ。且驚且感〳〵止ざれハ魯智深
彼おをこんとり〳〵。かゞりれ戯ハいまゞ屑なるまぞ。これ明日武藝を演し。
器械を使つ〳〵こんとべ〳〵つゆ。こゝを去るべ〳〵回答〳〵。當晩そおの〳〵
こりる。次の日を始と〳〵張三李四ゞ徒ハ智深をこる毎ゑ遍〳〵的伏〳〵是
を敬ひ。日〳〵み酒肉を將ゆき〳〵。ゑくまゑ〳〵饗〳〵る。ゆゑ一日魯智深そつ〳〵し
これ日来彼おゞ酒食を喫ふ〳〵いと之ハ。今日ハ些を安排し〳〵。還席ゞやと

前さひ〳〵ありいまゞもいまゞして三月盡し題もるる更ホ解きんうすす

〳〵道人ゑ命せ〳〵。二三擔の酒〳〵猪羊菓子のごとひを汚せ。准備既ゑ整へ
て。この時ハ二月盡の天氣いと麗あれハ。緑槐樹の下ゑ蘆席を鋪せ彼潑皮
ホを招き〳〵。おの〳〵樹蔭ゑ團坐せ。大碗をり〳〵酒を飲ゑ。や〳〵喫
も〳〵濃なり。時ゑ張三李四一齋いつゆ。我門前日師父の力を演ず。
ばこれ〳〵いまゞ器械を使ひもをこんぞ。頻ハ些をこんせ人〳〵
清至ホゞ。魯智深やゞ〳〵房内より。渾鐵の禪杖をとり出。汝ホ
この杖をこんゑ長ハ五尺ホ〳〵。重六十二斤なり。これ今これを使ひてこん
まべきみとそといハ潑皮ゞ大ゑ驚き。倘ホの臂膊水牛の氣力な
〳〵ゞゞハ〳〵ゞ輙く使得ん〳〵ぞ感ゞあへるる。その時魯智深そ彼
禪杖を把り〳〵颼〳〵と使ひ動ゆみ一上一下半点の參差なれハ衆人
ハいまゞ声を揚一奇ゑ唱〳〵称る折〳〵も官人めきる一箇の漢ゑ墻

魯智深菜園ニ緑楊樹を拔く

そぞろ禪杖を使ふ
魯智深
林沖に遇ふ

外よりこの光景をうかゝ使ひ得て好使ひ得て好と唱采して魯智深
はるゝまを住めいとまを墻の缺に遑なく立著る一箇の官人その打扮恵
生とあれば青紗の抓角児頭巾を戴身に緑羅団花戰絶を穿
く腰に雙搭尾亀背の銀帯を繫脚に磁瓜頭朝様の皁靴を穿
まに摺疊紙西川扇子を執頭を翁のごく眼に環のごく燕の頷虎
の鬚身材八尺年紀に二十四五なるべ。この官人は墻のほとりにあり
く。彼和尚の形勢器械とりくもにあらずして独言して極て潑はなさず
めきく。彼教師さん唱采にあらずとあるべしといふに魯智深
も知らずして汝は彼軍官を考るとなく問べきか若いかこの
官人は八十万禁軍鎗棒の教頭なり。林冲と名告るなり。よくく世の人林
武師とも林教頭とも稱りく回答されば原来由緒あるかとて誘ふ

さんとうくく相語るうちに林冲墻を跳越えて。ゆゑて槐樹の下に
来る。魯智深と名對面する魯智深はその刃出家する一五一十審に
説をり。さていかゝるれば提轄のむかし。令尊林提轄とは一面は交
あり。ゆゑに今教頭をうかがはれば面影ありあんとかと信
やうにあるゆゑ。林冲も喜びく。師兄こそ亡父を認りるゆゑ等閑
の緑中にあるを願くは義を結びく兄弟とあるべしとの人
魯智深ふく感悦して。それとは来てもいかゞせる友に遇ぬ。ゆゑに
今日さいはひなり。大哥は見て義を結びく兄弟のちなみをやまく。大なる
幸ひなり。又教頭には何の故ありく。這里は来るひとと同林冲答てそれ
ゆゑの荆婦とともに間壁の嶽廟割李王を祭る廟なり。身二巻玉進る清く。
還香願にゆくるに遥に器械の響をみゝくそのくをあらとして荆婦と

女使錦児を著く。廟裏に残しおき。漫ふとへいまわれりしかばぐれ。魯智深いよ〳〵ふるとびつ。再び酒を添〳〵管待ぶ。女使錦児脸うち赤め。慌忙く走り来る。墻の缺より林沖を叫〳〵いふ。官人とく〳〵目今娘子廟の裏におやく〳〵人合に出るくるひも果ざるに林沖此〳〵盃を放在く。彼今那里に在ると問ば。錦児答く。娘子五嶽樓の下に如何を髻の好誰不及的ぞ。ちぎと叫〳〵極み林沖ちんく〳〵ころ賺魯智深よりも對ひ。それぐしぐて帰り来りんに。無礼ぬ恕しの人りちひけく。墻の缺を跳こえ錦児とも五嶽樓に来〳〵こえぶ。件〳〵ぶぐて数箇の人弾弓吹筒粘竿伐好〳〵。欄干のわきりに停立胡桃箱より始る後生林沖が妻を抱き住ぬ。これもまに上りまんぬべきこなり

あんとうち調戯く立られぬ林沖が妻驗を赤一素平のせよありあく世の理非をも辨を良人の婦を捉く何ぞを〳〵いく深ぐ〳〵〳〵ち腹立拖さまさんとすれども放さぐ。せんもべ〳〵ぬく〳〳〳〳林沖搶と走り来彼後生が肩胛をうん摑こ。汝膽大くも白昼に他の妻を拖ちくへて調戯人〳〵本管高太尉の螟蛉子高衙内ぬ〳〳ありしぬ再びうち驚く忽地拳を下し〳〵ぐ。抑高俅義歩〳〵既に大臣の班につらるるしく〳〵も〳〵未實子おうし〳〵ぬ。阿叔の高二郎こいふりの子を養ひ〳〵ぐ児としこれを高衙内と〳〵〳〵鍾愛大〳〵あ〳〵ぐれぬ彼又養父の威勢に倚て。〳〳ぬ他の妻女に調戯〳〳〳〳京師の人もこの權威に怕れく。誰爭ふのもく私ふ順〳〳花〳〳太歳〳〳あ〳〳つ。さて林沖ぬ元〳〳〳〳混る高衙内ぬるをりて。おの

錦児と将く林冲
山嶽廟ヨ来る

乾坤大

高衙内調戯
林冲ガ妻ヽ
迫る

かゝるふりも揚し拳さへ軟くて。さらにその問答に及ず。高衙内は又彼婦人を林冲が妻なりとも知らざれバ。忌憚る氣色もなく。やよ林冲。汝が管することにあらず。とく退ねかしといひあへず。再調戯んとしつるけしき。高衙内の従者ハ胡擲の上一時にさわがしきなりて。こまねきつゝも擁来る林冲がこゝにあるをうかゞいし傍痛ければ。さらぬ態にて彼を勸め。又高衙内を和哄へ廟を退きゝし主をバ馬にのせて立しほどもなく入りきぬされど林冲ハ怒いまだ消ず。歯を切りて佇立しが。かくてあるべきにあらねバ。妻と錦児を領て下向に赴き。只見れバ魯智深鐵の禅杖を挈げつゝ二三十人の潑皮を引着つゝいで来り。これ今汝に寄ふて彼奸賊を厮打さん為に来りと呼る聲に。林冲ハこれを廟の門外に迎へていふやう。吾が妻に調戯る後生ハ本官高太尉の小衙内なり。元来林冲が妻を認らずして。一旦無礼に及ぶといへども。太尉の面に看て拳をも下さりし。古より官に怕ずして管に怕るといふことあれバこそ。かく他の情愛を得てしらるゝて。さなくバ。魯智深ハ只顱眼を睜ひらき。いや汝ハ高俅を怕るゝとも。われハ彼撮鳥をおそれず。一隻の狗のごとし。今ニ百の禅杖を喫せずハゆるすまじわれ。といきまきあらく罵りけり。林冲ハ智深がいたく酔けるをみて。師兄の說話理なり。林冲も彼を怕るゝにハあらねども。衆人に勸られて且く權に饒せしのみ。ふたゝび怒りをひきおこして都てことさら和むるなぞて。魯智深又いふやう。備りあらバいつなりともあれて我にまかせれ。呼あひ立地に走り来て汝を助くべし。あなど。かりそめしも言語果しもおはりしバ。夥の潑皮ども誘へりあるへしとてこゝをろする促バ。魯智深ハ林冲が妻をうかへり。阿嫂これを怪るて笑ひながらのたまふよ。明日又こそ来さんずれといひをはり。衆人に挂られて。廨宇のかたへ退りけりかく

く林冲が妻と錦児を將て家へ入り。こゝろ驚きて樂しんで。こゝへ高衙内が一斑の閒漢を引ゐて府中へ立入りしが。ひゝび林冲が妻を見そしらうゝ。こゝち惑ひ〳〵忘れ〴〵。徒へ心を焦して。あゝ三日を過せしに飛雪の閒漢さゝぐ〳〵來りて。四表八表の如くにして。兵顧慌めりれされども敢きの〳〵乱れ入れば。お沒撩沒乱して退出して乾鳥頭富安といふ者。のこ〳〵とり殘りそゞりて。傍へ人あきを窺ひ前向く稟まを四ツ八ツ閒衙内を見まもる面色快うまぶして。扨おのやうなる生きなるこの病源を言りの。富安なるべきいふて高衙内合笑く。汝のとう猜しるとの。富安答く。衙内の扨ひ雙木の字れ謎のやうあふずやとふ高衙内これを聞く。そつぎ言ゆるお多ひ汝が推量よつ違を。これこの故へ納得なりさていふしてようんとの。富安いふ。

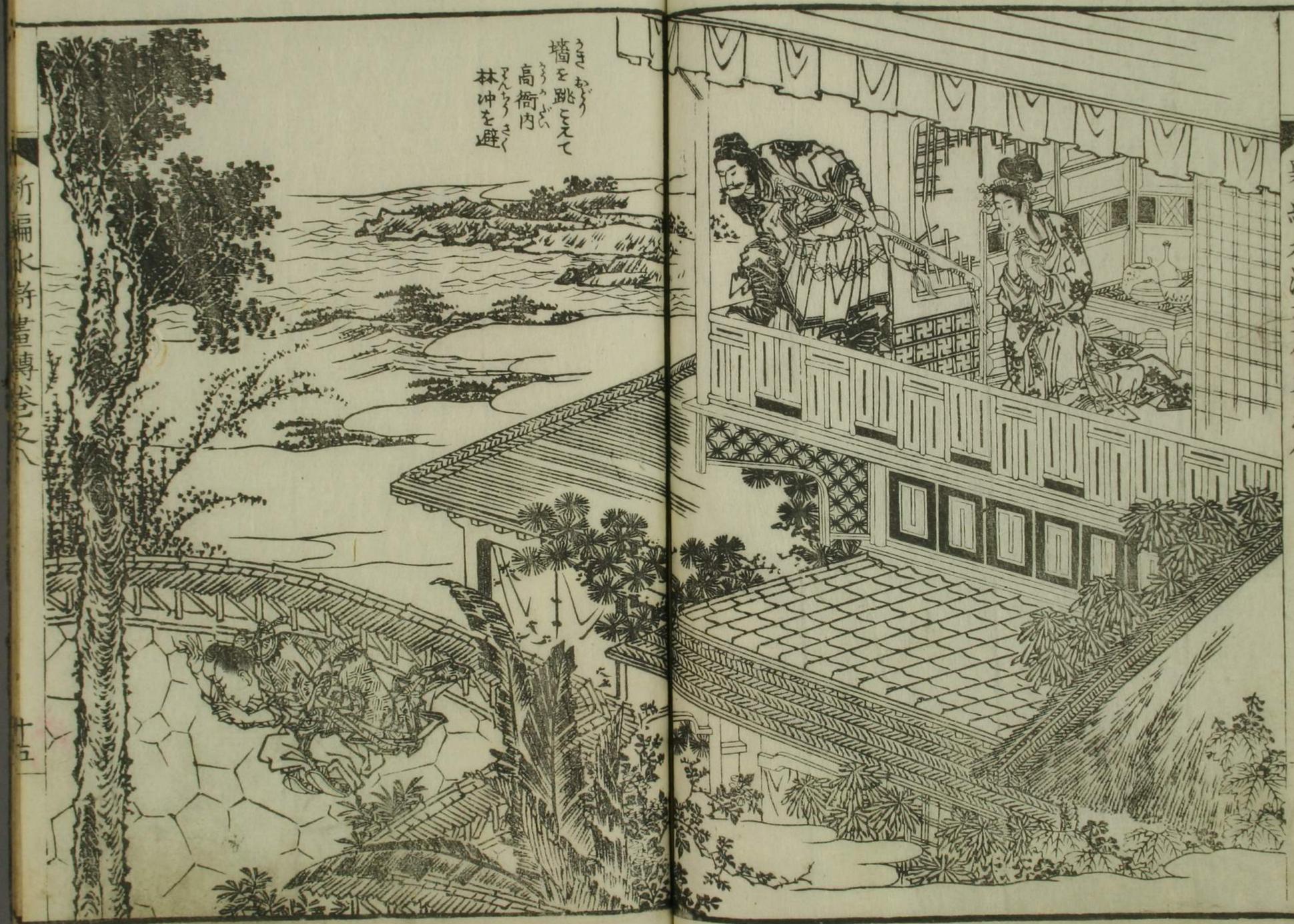
あゝて衙内仰して林冲を怕れく却て欺きのふる。彼は其に帳前の紙頭なり。太尉に悪れまゐるとき。驚くく滴れ重くは殺されんを。一ツの計あり。頗く林冲が妻を誘ひ。あゝ進ぜうんと耳語を高衙内ようこそ。これ我箇の艶なる少女をこうれ。いまゞ林冲が妻に反ず。汝がこの言をうのへ。ゆゑ仕なんとく。計を流ゆせり。といふ富安は賞の一句を。ゆく。滿面に笑を含み。お母声を低して。陸虞候陸謙は林冲に交り厚し。明日衙内は陸謙が家の樓上に些の酒肉を設おきく。耶里に躲在し。陸謙に命く林冲を化処に誘引出すを。その時それ〴〵林冲が家に到りく箇樣〳〵いひこらく彼妻を誘ひく。衙内に逢せ進まべ。婦人は水性なるものなれば。君が風流なる人物をうをこれかゝる些の甜話児をとりく挑ゆて。縱鉄石の人なりともいで

幻を動ざらんとの計いとはんとすれば高衙内堂を拍く稱漢一とのの
計奇妙なり。そ〻陸虞候を召せといふて富安こゝを退き出づ。彼陸虞
候陸謙が家へ高太尉が府と隔壁巷内ふ〻くありしかやうて富安とともよ
山まあり。時に高衙内へ富安が說こゝの計首尾を說ケセ汝速よとのゆを
行ひへといふ陸謙これをよく。一トゝびハ驚きしが高家の權威に怪ずて
敢推辭ず。只高衙内に喜られんるをこひ忽地明友の交情を顧ざ〻く。
異議なく兼引ちうする。

○豹子頭梁〻白虎堂に入る

且說林冲ハこゝろ樂しうふざれいその後ハ〻〻街上へも出ざりしに一日門
首に人来り〻。教頭家にありやと問林冲これをよく。こゝに立出て使に
これ陸虞候陸謙なり。時に陸謙がいふ〻。教頭頃日いかゝしてこゝへ
ざる。あまり疎闊さに訪まうまうかしとゝ林冲答〻。これ近曾公
ふ〻ざるゆあるようて。かくとり落ひあるゆゞ裡面に入り〻茶を
拜ものとひつ。接〻客房に使ひんとされば陸謙がいふ〻。ちうど今
教頭を家に誘ひんとす〻〻盃を勸め。憂をも慰めんと誘ものとひそし
ろ是ハ林冲が妻との声をりれ出〻。布簾の下に走り出。やに陸虞候我
まこゝハ少し仰せ〻。ちや〻帰して〻よといふに陸謙急頭〻。阿嫂さのこゝ
ひまこゝのふ。大哥をバこゝ家に伴ひ〻〻。こ盃を喫ふことをといひも
あへず。林冲ハこゝも走り出。既に街上に起きしう陸謙忽地いとりとる〻〻我
們酒色の家にありて酒を喫んも負ふ。誘樊樓にゆき〻〻半酣に酔
を竭さざやといふに林冲ハとも〻〻と回答〻。直に樊樓といふ酒店
にいたり。數の酒肉を出させ〻盃の数もをりしとき林冲ハ顧嘆息せ

しゝ陸謙怪しゝその故を問ふ。林冲答へ。男子一身の本事ありながら空しゝ明主に遇ず屈しゝ小人の下に沈在今この晩賸的氣を受ふ大なる不幸なりしやと。陸謙笑へ。今禁軍中幾箇の教頭ありしに。兄長の本事に及ぶものなし。殊さら高太尉ふもとき〻看業なるを那〻誰的氣を受ひしなどいふ。林冲の前日高衙内のゝゝもおもちもあゝ告訴ゝに陸謙又いふ。高衙内一旦婬ぶしきゝあり。教頭の娘子ゝきりまぐなどて憎おぼまぐらん。もしれば必ず怒に足ふまで何ぞも休氣ゝ。只顧酒を喫まんといひ慰ゝ。林冲又八九盃の酒を喫ふ遣を要んとて樓上を走り下る。酒店の門を立出ゝ東の小巷に到りつ。淨まをる折しもあれ。女使錦兒慌忙ゝ出来り。目今官人を尋まをゝせゝ。彼此を走めぐりしゝど。又えあらず。原来這里に在しれとつゝる。林冲驚きゝそは甚事ぞと問へ。錦兒答へ。前に官人は陸虞候とゝもに立出ゝ。いゝ祇もあゝ。一箇漢子驀直に走り来て。娘子に對ていゝ。それは陸虞候が鄰舎のなる。汝が家の教頭陸謙ゝ酒を喫。一時に昏絶ゝ仆迷ひぬ。こは重氣といせゝのやあらん。いまゝゝ綽斷ざる間ふ娘子をもいゝゝ。といふまゝ。看病しゝ。へと叫ひ。祖母娘子大に驚きひゝ連忙ゝ間壁の王婆を央ゝ看了家させゝ。ふを將ゝその人ゝとも。陸虞候の家に到り。官人は那里ぞと問ふ。人は樓上にと答へ。ゆきゝ又ゝ阜子の上に出酒肉を安排し。官人はゝゝ又ゝ退出んとしゝ。前日嶽廟ふゝ。娘子を囉唣せし。後生に生まりゝ。娘子ちでしゝ。人の丈まを来まりゝいひつ。調戲んとまをを果ぞふを樓上を走り下りゝ。


牆を跳こえて
高衙内
林冲を避

娘子ハ家に拖とめられて只顧叫びあひし絶て直にその家を走り出て。官人を尋まみらせしかども。その往方をしらず。路にて藥を賣張先生に問はりしに教頭ハ樊樓といふ酒店にありて一箇の人と酒を喫ませ給ふを目今見たりと告訴しけるより。忽ち人ハ來れりといひもをはらず林冲すゝみて怒り起て敢錦児を顧ず三歩ずつも一歩として陸謙が家に走り行て搶と胡梯を上りしが。既に樓門を関著。裏にハ妻の声して叫びけり。清平の世界に何とて良人の婦を拙くぞ。這里に関在のふと呼ぶ。又高衙内の声音とおぼしくかくすくとも思ひ焦がるゝなど強顔けくなしたまふ縱鉄石の人なりとも此のあはれハきゝ給ふべきなど云めげなき口説を林冲聞て声をふり立て。妻よ戸を開よと喚けば婦人ハ丈夫の声を聞て。慌しく樓門を開く隙に。高衙内ハおどろき騒ぎ。窓樓の牖を空開て墻を跳こえて逃去りぬ。林冲ハ裏にいりて高衙内を尋るに見えざれバ妻に對て。汝が身ハ點汚されたるかと問ふ。いなでさるけしきハ侍らず。死るも身をバ汚さじと思ひ定て侍りといふ。されど林冲ハ忿怒に堪ず。身を跳起して陸謙が家を粉に打碎き妻を伴ひて門外に立出れど。両辺の鄰舎どもハ恐れて門を閉てこれを避かバ。此處に女使錦児も後走にきたりしかバ主従三人すゞ家に立かへり。林冲ハ一把の解腕尖刀（日本風土記にカタナ。刺刀の長尺あまりのを解手刀といふ武備志日本考も又同じ小說にも手刀と書く。腕に通じ用也。解腕ハ解手なり東涯先生の名物六帖にヨロヒドホシと訓ぜり一說に解手ハ大小便をもよほすをいふ其解手の用心にもちふ短刀なりといへり）を拏て。再び樊樓の前に到て陸謙を尋ぬるに日ハ晩るまでも環會せざりしかバ家にかへり來れバ。その妻丈夫を勸ていふやうハ彼に騙されしかど敢て身を汚せしにもあらねバ只々門うち体氣て胡做まじひぞと言語を竭してとゞむるにぞ。林冲頭

林沖蒙傑只陸謙あいそのあくまずあるを見て怪しむ

をうちふりまいぐるいぐるう耐耐べき。只慢べきは陸謙畜生。年来親く交参く。只のごとく。寄のごとく。まことふるまれを騙く。高衙内よ媚を索む迷ひ恨いぐれの日ら消んといはまく。あまくまく罵ののしりまくそのあくを照管しとうば。妻はあるは若よ勸つ。その夜は放放門を出さまで陸虞候もかくあべうろひ。極よ高太尉の府内ふ躲在く。敢家よ回ざれば林沖は一連ら日。その在家を定められど。ここえ面をこるるひあく府の糸なるくも。林沖が新色の好ずるをこんくふ怪しあくりくそ。貸四日の飯時候よ魚智深尋来く。教頭何ってそのちは音づれもなくりくふ。林沖答く小芽をうぶぎもるる紛れく。師兄を探まわとせざりしよ既ふ寒く舎よ来臨くるあれいこ盃を草酌べくとくも。一時よ周備がくまふ。師兄くもふ街よ出く酒を喫べ。いくゆきまのまきやとくむ。

智深はくまう。去うべくと回答くつりくもよ立出く。一日の酒よ飲くまふ。浩くぶし明日又見えうんとて別ぶ。只よりは毎日よ魯智深よ伴ま街よ到りく酒飲あそび。這件のるはおいそへやくやく放慢りり。且況高衙内は那日陸虞候が家の樓上ふ林沖よ驚くまま墻を跳とえく脱去ぬ。このるは養父高太尉よ對く告べくもあぐれいよく愁悶つ。遂よ長き病名くりて。ふくびく起もあぐりけるを。一日陸虞候陸謙は富安とともよ府の裏ふ指高衙内の顔色を憔悴くるをこく。衙内が行なれは憂をくくして樂少くもはくまくそ。同よ高衙内答てこれ寄よ汝達を瞞まて。彼林沖が老婆の爲よこの病ひを添くれば眼見的半年ま箇月も。性命は保ぐくんと。心ほそげよゆれは二人言語を齋く。心を寛くくまの。ぐくまそ好も又も小人あるよ打まうせく在まぞ。

陸謙
富安
老都管
説

彼婦人を誘ひ〻。完聚すべし。うそうけつのひ屈一ふふやあるべし。いひ慰〻折〻。府裏の老都管。役所の人。自分の家来なり。生来り〻高衙内の病症を看るに痒〻痒〻。渾身は寒〻〻又熱〻。腹又飽つ又饑つ。白昼は狼を忘〻つのあり。黄昏は寝ざるのみ。爺娘に對て。心中の恨を訴〻〻。相識を〻〻。臉上の羞を遮うね一光景なり。その時陸虞候は富安と商量し。老都管は病を看て退くをまちうけ。これを僻淫處に邀〻いつ〻。衙内の病を速に愈んのを量るべし。只今射る箭〻林冲を除き。彼が妻をぐに進ふせるのが。日を俟ずして平愈あるべし。さうせざれは彼性命。とても救ひがたんと耳語は老都管に烏頭〻。容易〻〻。老漢今夜を射る禀ねんと。義引は二人喜びて。我們既に計あり。只足下の回話を待いつて別し。老都管はその夜高太尉に衙内の想思病。陸謙富安おのおの備細に告せしが高俅は〻。林冲を除き。彼が妻をとる〻〻。孩児いろの徒より林冲が妻をとる〻〻。老都管又禀すべし。これは前月廿八日。獄廟にて〻〻。今一月あまりを経て。如此〻〻のみあり〻〻。陸謙が計〻も。審に流了まへ。高俅つ〻〻。かまへ彼が渾家の故を〻〻。いでそれ兒を害すべき。林冲一箇は惜に足らず。このみいうせが好らんとて。老都管うけのり。陸虞候。富安の両人既に討較あるよ〻〻ひ〻。いひもをつぶるそれ〻〻呂せもあるべし。老都管こゝろを〻〻。やがて彼二人を呼びまれが高俅これを迎く招き〻。つゞみ衙内のみ。泄おを甚の討較うあり。彼が性命ぐに修ひおいれうのふぐ泄おを擡挙す。膝行〻〻といふその時陸謙頓首膝行〻〻前に向ひ恩相今上に在まこの計旅易し。共林冲を除んまに箇様〻〻と

耳[illegible]高俅は打ち〳〵笑を含。この討最好汝は明日。これ〳〵もよこれを行く
よしの〳〵只顧喝采〳〵止ざりけり。話この下よあり。さて又林冲は毎日は魯
智深と共に街に出て酒を喫こと這件のふところを記す。一日二人同行して。
武陽の巷口に到る。一箇の大漢子頭に抓角児頭巾を戴身に旊舊き戰
袍を穿て。腰に一口の宝劍を佩き草標児紙幟の を挿こゝ。街に立在
今識者に遇ず空しくこの宝劍を屈沈まるるかと独言りゝ。林冲は
それを聞つゝ。只顧魯智深と語ながら徐に彼漢その背後に跟く
出〳〵まつ。惜べしこの宝劍遂に識者あ〳〵とは林冲これをゞ耳にもうみぞ。
あ魯智深と行つれ〳〵ちて。ゆ〳〵巷に入り〳〵ば彼漢その背後にのりて
かゝる時東京に軍器を識るこのゝえ〳〵あらざるこそなれと二〳〵び
〳〵び独言りれば林冲もゞめてこれを見て頭を回して〳〵ゝ彼漢に件

の劍をまもふと制に將ゝさ〳〵出もよ明晃〳〵て裏あ塞〳〵林冲は此
劍事あるりのよこと〳〵けば彼漢よりも對〳〵その利劍を又せよと
いへ。こゝろを〳〵これを遍まその村林冲は魯智深とともに。ふ〳〵び去
をこゝろに清光月を奪ひ冷氣人を侵し。遂〳〵又是は王沼の春氷のごゝ。近
くこれは瓊基の瑞雪のごゝ。花紋密に布ゝ。豊城の獄内潛の瘢華雷
豊城の令しも煥獄屋の基を掘ゝ石函中に二の燃を補〳〵
宝劍あるを見ゝ龍泉と呼ぶ。一云ふ阿〳〵
ゝ。楚昭の夢の中楚の昭王が呉王が湛盧の劍を
陽冶子が造るゝ所の宝劍。太阿龍泉は楚王の劍なり。も比べかゝ。干將莫邪
太阿龍泉は楚王の劍なり。も比べかゝ。干將は呉人なり。闔閭の劍を造りし人
を干將といひ。その妻を莫邪といふ。干將
莫邪は
等閑なるべき宝劍なりしかば且強き且愛〳〵。汝い〳〵ゞ〳〵の錢に賣
るゞ〳〵同じ彼漢子答〳〵。索價を出せ〳〵千貫なりといへども實價二
千貫あ〳〵賣いべしといふ林冲ゆ〳〵。値は二千貫あり値ゞゞれどこれを

武陽の巷に林冲宝剣を買ふ

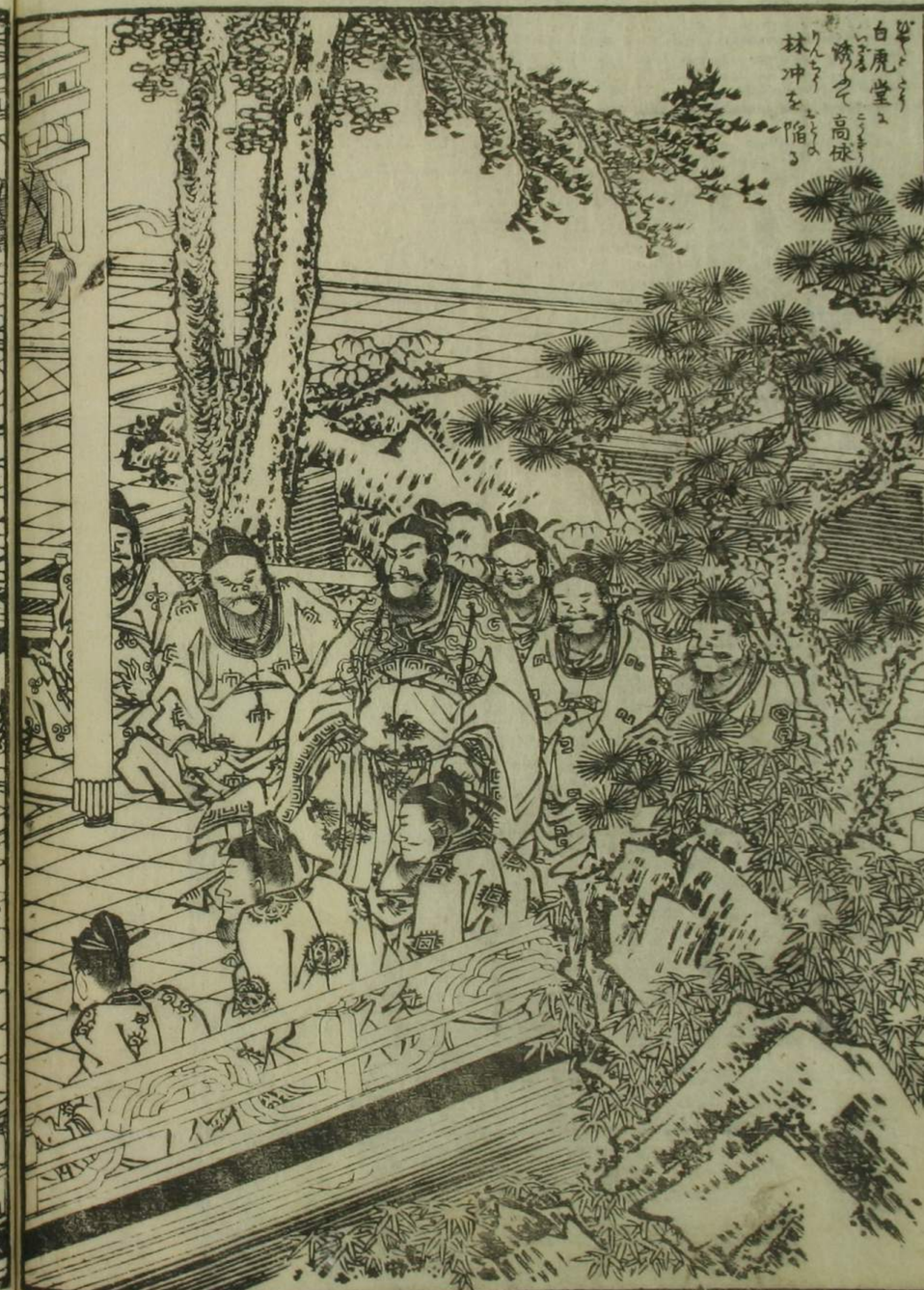
よく識くく買へもあるまじ。汝り一千貫よ肯あるべ。それ買くもせん
らの漢子おそ〜尋思して。そん急ぐよ世の銭を要りれば。五百貫を饒ら
うよ。千五百貫賜りへらへば。林冲改をかりて。いま〜千貫あるべ。買ひとつ。
漢子呉顧嘆氣〜。かく宜いまれば。せんすべなし。金子を生鐵として賣へ
へ。罷く今ハ一文のもいでとけ判あぞ。林冲烏ぢく。おうべ銭を遂んよれ
よ徐ひく。まよとひつ。又魯智深よ對く。師兄且く茶店よ憩ひく等まへ。
小厮ぜ〜くり来りうんらへば。智深ぜ〜これもすぐ立くく。明日又ええ
いうん教頭慢〜地くるをなしよう。いひをろ。やがてこれくくり〜徐よ
林冲ハ彼漢を領く家よ到て。銭を彼よとせ汝との剣をば。那里よりもくる
宜ば漢子答く。ぞいこれ〜が祖上相傳の宝剣なり。家道消えくいへば。
あ〜將出く賣いへ。林冲うまよく。汝ぞ祖上ハ誰あるぞ〜問ば彼漢敢告ず。

りいふきハ人を辱抹なりといふよりて林冲ふたび問ぞ。彼漢ハ價銀を沼
くくり去よりれば。林冲ハこの剣を把く。翻来復去つ〜〜えつ。呂顧これを唱
采くいまく。高太尉の府中よ。一口の宝剣あるよ〜をゆ〜〜〜くよえするをの
許さざれば。いまぐ面あくりえぞといへども。縱その宝剣よ比ふとも。よも劣らせ
じ〜ふりごち。おそ〜えまをも放さば。その夜ハ壁ようけおき〜。天明をもく
ぎ〜く起出。又彼剣をとえうくえ〜ふく愛よろこび〜よ汝の日己牌時
ぞ分。両箇の兼局和よいふ雑色。今の使徒のきぞひこ来くくいまく。林教頭汝一口の宝剣を
むくるよ〜を。高太尉ぜ〜め。自己の宝剣〜比看ちうんとそ。りんいら
等せまふなる。誘ふへして急〜〜うれば。林冲ゆくくふく〜怪く。甚麼ふる
多ハ的が報出くくぐ剣を買ひるしるのそ〜太尉ハゆえりんと疑ひ
惑ひいふ。衣裳を更く彼剣を擎了。両箇の兼局〜打つれ去ちく。

既に家を立出しぬ。あの日公孫勝おるとおもへば、兼局に對ひ、いまこれ日来府中にあるかは汝丈人を認めもいつの程よりか帰り仕りぬぞと問へば二人答て我們は新近帰隨あり。よりて教頭に面會まゐらせんとぞ。ふこそ。回答まゐる間に府の前に到りぬ。ものもの廳前に到る。こゝに太尉をまちうけまゐらせ丈人のいまこそ太尉は後堂にこそ坐まなれ。誘こゝへこく待ひしぬ。這里にものもの高俅を見て林冲又ぐまりたるを。兩箇は兼局に入いふ。原来太尉は裏面に在ゝ等あひうけ。来るへとひとけ。あは奥ゝ伴はゆく通ふ。門二ッ三ッを過ぬ。一箇の去処に到りふその周遭をべく緑の欄干なり。彼兩人はこの處に林冲を賓ゝ教頭少くまちまへ。我們太尉に報さんとて退出り。さて通に林冲をまゐ劍を帶まゐ。ゝ簷前に立在り。兼局が音づれをまゐる。一盞茶時出

まゐぶざれば以よりこゝろ疑ひつ。簾を揭ゝ裡に入る。簷前に額あり。白虎節堂といふ四箇の青字を写しれば。林冲猛に者きこの節堂は軍機の大事を商議まる處なを。今故あゝ〳〵〳〵〳〵きこの處をこゝに欺まるゝ驚き怕まゐ走り。忽地靴履響高く出ん〳〵る折しも。林冲これを見は別人にはあらず。却ゝこれ本管高太尉なり。劍を執ゝ拜伏まゐ。高俅は大怒て林冲汝呼ぶるもおろかなりて白虎堂へ入りぬ。汝既に禁軍教頭なれば法度はこゝろうつゝ。殊さらまゐ劍を含まゐる。下官を殺さん爲欲きのふ人あり。ゝ告ん。汝三日前みと。刀を含まゐ府中を張望ゝ。あゝまで反心あるこゝ。林冲身を躬ゝ稟ゆ。小人嘗野心を挿むあゝ。目今兩箇の兼局

白虎堂


白虎堂に誘ひて高俅林冲を陷る

林冲ニ劒ヲ責又白虎堂ニ誘引ス八陸謙富安ガ生死ヲトヾムベシ

が言を信へ太尉。林冲を召て。刀をこんと宣まるよりく〳〵ゑれて。いせ。あゝ。高俅大ゝ唱く〳〵いふ。汝兼局ゝ伴ゝ〳〵まり〳〵いふの人ハ今那里ゝ居ぞ〳〵責問ハ林冲答く。彼両人ハ太尉ゝ報さんく〳〵。退出ゝ高俅ゝ〳〵怒を發く。このゝ却く〳〵胡混なり。誰あもあ是故ゝ〳〵。この節堂へつるゝを許さゞ法を。汝も豫く〳〵もつて。誰ゝある。這廝を拿下よ。いひもをつゝぐるゝ。傍邊なる耳房裏ゝより。二三十人走り出く。林冲を把く〳〵押横ゝ推〳〵倒ゝ拽。恰阜鵰の紫燕を追ふがごとく〳〵。猛虎の羊羔を喰ふがごとく〳〵。忽地索をうけくりる。畢竟林冲が性命いかゞや。次の巻を讀ゐく〳〵ちよん。

新編水滸畫傳卷之八　畢

讀ム人モ共ニ

君結交ヲ年二月積
ル年身ヲ三月四日穂抽
初年祖月